

表3-1-2(3) 参考文献リスト

No.	タイトル インデックス	文献タイトル	掲載誌名	発表形態の区分		発行年	頁	発表者 インデックス	発表者	カテゴリ	キーワード	要旨(能代断層調査関連)
				学会機関誌・団体研究発表・大学研究・公的機関・図書	発行年							
40	くわな	桑名断層・四日市断層の活断層履歴調査	平成9年度活断層・古地震研究調査概要報告書	地質調査所		1997	75-90	すがい	須賀俊彦, 栗田泰夫, 下川浩一	活断層調査	三重県, 活断層調査	「縄文後期の海進」、「弥生の小海退」、「平安の海進」、「近世の海退」という完新世の海面変動史から桑名断層の活動履歴を明らかにし、同断層が13世紀以降に動いたことが明らかになった。
41	にほんかい	秋田臨海平野の形成史	地質学論集, vol.27	日本地質学会		1986	213-235	にほんかい	日本海中部地震災害(1983年)秋田大学地質調査班	地震災害 地史	日本海中部地震, 地盤災害	能代平野、八郎潟地域、秋田平野の秋田臨海部沖積平野の内、八郎潟地域は、独特な環境下で形成したと考えられ、地域全体の沈降という構造運動の支配を受けていると考えられる。
42	にほんかい	日本海中部地震 地盤と地盤災害の概要	日本海中部地震記録集	能代市		1986	56	あきた	秋田大学地質調査班	地震災害 地質構造	地盤災害, 液状化, 噴砂	能代平野内で掘削されたボーリング資料や、微地形により判読された旧米代川の流路の変遷、古流系などより、沖積層の層序断面を作成し、能代平野の形成史を考察した。
43	のしろし	能代市史「特別編」-自然-自然環境編	能代市史	能代市		1996	54-71	くどう	工藤英美・工藤浩三・藤本幸雄ほか	地史 地質構造	ボーリング資料, 地質断面図, 沖積面, 砂丘	地形の関係を考察した。また、沖積層と海水準変動曲線、地形面と堆積物との関係についても考察を行った。米代川流域ボーリング資料豊富。
44	のしろ-じ	能代市の地盤地質-特に1983年日本海中部地震の平均震度分布に関連して-	秋田地学, No.36	秋田地学教育学会		1986	1-13	ふじもと	藤本幸雄	地質構造	ボーリング資料, 地質断面図, 沖積面, 砂丘	度分布との関係についてまとめた。特に、数多くのボーリングにおいてテフラを報告し、それらにより能代市の地形形成史を明らかにした。
45	とわだ	十和田火山発達史概要	東北大学地質古生物研究邦報, No.73	東北大学		1972	7-18	なかがわ	中川久夫 ほか	テフラ	十和田火山, 降下軽石	十和田火山は主に5期に渡って活動した。第2期は13,000年前に、第3期は約9,000年前から4,000年前の期間、第4期は3,000年前から2,000年前までの期間、第5期は1,000年余年前である。
46	のしろ-さ	能代砂丘の構成と構造	北村信教授退官記念地質学論文集			1986	403-412	しらいし	白石建雄	地質構造	砂丘, 腐植土, 海進海退	砂丘Ⅰ、Ⅱから構成される。一方、八郎潟が、外洋から遮断されたのは完新世堆積期のことであり、付近一帯は沈降運動を続けていたことを示す。
47	あきた-よね	秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形	地理学論評, vol.39(Ser.A), No.7	日本地理学会誌		1966	13-34	ないとう	内藤博夫	テフラ 地形	段丘堆積物, 毛馬内軽石	布し、それらは段丘地形と密接なつながりをもっている。中でも高市、鳥越、毛馬内軽石質火山灰層はその堆積面を段丘面として残している。
48	1983	1983年日本海中部地震による地盤災害と表層地質	地質学論集, vol.27	日本地質学会		1986	237-256	あきた	秋田大学地質調査班	地震災害 地質構造	噴砂, 液状化, コンシステンシー	日本海中部地震による被害は、秋田臨海平野部の沖積層分布域に集中しているが、一様に分布するのではなく、微地形に表されている表層地質との関連性を持つことが明らかになった。
49	かいせい	海成層の上限(marine limit)の認定	第四紀研究, vol.21, No.3	日本第四紀学会		1982	195-201	まえだ	前田保夫・松島義章・佐藤祐司・熊野茂	層序	海成層上限, 珪藻遺骸, 化石, 黄鉄鉱	海岸平野に伏在するmarine limitは珪藻遺骸群集や黄鉄鉱の析出の有無が有効である。生体化石や貝類化石の上限は若干低い層順になる傾向がある。
50	にほんに	日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題-1980~1988における研究の展望-	第四紀研究, vol.29, No.1	日本第四紀学会		1990	31-48	おおた	太田陽子・海津正倫・松島義章	地形 層序	相対的海面変化曲線, 後氷期の海面変動, 海成層上限	1980年から1988年までの完新世相対的海面変化およびそれに関連する諸問題をまとめた。北海道、近畿において「弥生の小海退」以降に「平安海進」が認められることを指摘した。
51	とうほく-ち	東北地方の第四紀テフラ研究	第四紀研究, vol.30, No.5	日本第四紀学会		1991	369-378	そうだ	早田勉・八木浩司	テフラ	広域テフラ, 十和田中セリ, 御岳第1軽石, 最終間氷期海面	東北地方に分布する広域テフラの内、十和田-中才取テフラ(To-Cu)テフラ、御岳第1軽石(Pm-I)を取り上げ、その分布や層序を検討し、併せて東北地方の編年学的研究と課題を述べた。
52	かいてい	海底地形から見た日本海の海水準変化	第四紀研究, vol.21, No.3	日本第四紀学会		1982	203-210	さとう	佐藤任弘・茂木昭夫	地形	大陸棚, 改訂平坦面対比, 最終間氷期の最大海水準低下	海底の平坦面を比較し、最終間氷期以降の最大氷期低下期以降の水面変化を解析。
53	ようろう	養老断層の完新世後期の活動履歴	地質調査所速報	地質調査所		1999	89-102	すがい	須賀俊彦 ほか	活断層調査 層序ピット	群列ボーリング調査, 層序ピット	最近の活動の記録が少ない未知の断層において、群列ボーリングと層序ピットの組み合わせが有効である。
54	ぼうそう	房総半島南部保田低地の完新世海岸段丘と地震性地殻変動	第四紀研究, vol.38, No.1	日本第四紀学会誌		1999	17-28	ししくら	穴倉正展	地形 地史	低地, 140年代, 1703年元禄地震, 地震性地殻変動	震と、元禄型と呼ばれる半島の一部は隆起する地震が認められる。本論では分布する段丘がどちらの活動で形成されたのかを明らかにした。
55	こかんきょう	古環境評価による地球温暖化の影響評価の試み-日本の代表的な湖沼・内湾の過去1万年間の堆積速度の変遷-	電力中央研究所報告	(財)電力中央研究所		1996	1-29	いとう	伊藤久敏	地史	古地層, 異常地震動, 微地形, 地盤地質	八郎潟中心部で42mのボーリングを行い、八郎潟層を確認した。奔走は内湾・潟相を示し、孔底の140年代は約11,000。また、中間の年代から堆積速度を求め、2.7から1.3mm/年とした。
56	のしろむら	野代村と能代市の地震	秋田県立新屋高等学校 研修収録代10号	秋田県立新屋高等学校		1999	17-26	ふじもと	藤本幸雄	地史	地きゅう温暖化, 古環境, 湖沼堆積物, 縄文海進, 堆積速度	元禄の地震で米代川が浅化した記載がある。現地形では1/5千の地形図にも標高差が現れており、試験資料でも十和田起原の軽石に同様の構造がある。能代断層の延長の可能性がある。
57	にほんて	日本のテフラ北海道羽幌におけるクッチャロ羽幌(Kc-Hb)などの示標テフラ	第四紀露頭集	日本第四紀学会		1996	63	まちだ	町田洋 ほか	テフラ	Kc-Hb, Toya, Aso-4, 苫小牧段丘, 羽幌	苫小牧段丘の急汀線高度から15m低花崗岩(花崗閃緑岩)下位置に、離水層準にあるKc-Hbが認められる。